

第5回

冤罪を救える司法への道 自ら死刑を覆した検察官に聞く

有料会員記事

聞き手・平賀拓哉 2020年9月30日 6時00分



朝日新聞記者のオンラインインタビューに応じる江惠民・台湾検事総長(台湾最高検提供)



日本の司法の動向は、台湾司法界では常に関心が高い。事件は台湾でも報道され、検察官たちにも広まった。日本の検察は精密に捜査する伝統があり、なぜこんなことが起きたのかと非常に驚いた。

台湾でも検察官と警察が事件を処理するために、法律が認めるラインを超えてしまったことがある。ともに、非常に残念なことだ。

——改ざんなどの事件が起きる背景は

捜査関係者に先入観があると、被告にとって不利な証拠しか見なくなるからではないか。

大阪地検特捜部の主任検事による証拠改ざん事件が発覚して10年となった。

アジアで急速に刑事司法改革が進むのが、台湾だ。検察内部に冤罪(えんざい)を調査する部門が設けられ、証拠開示の仕組みも改善された。検察はどうあるべきか。江惠民検事総長に聞いた。

——大阪地検特捜部の証拠改ざん事件を知っているか

日本の司法の動向は、台湾司法界では常に関心が高い。事件は台湾でも報道さ

台湾では刑事訴訟法で、検察官は客観的である義務があるとされる。最近ではチーム捜査を行うとき、必要があれば裁判官と弁護側の役割をする検察官を置き、捜査側と異なる見方もふまえて起訴すべきかどうかを決めている。

——江総長は台中高検検事長時代の2016年、台湾検察史上初めて検察官として死刑囚の再審請求をした

検察官は冤罪と謙虚に向き合わなければならないし、検察官は保身的な態度をとらずに積極的に誤りを正すべきだ。改革のきっかけを引き出し、市民の司法に対する信頼を勝ち取ることができる。

——なぜ、冤罪が生まれるのか

人間が行う裁判なのだから必ず…

この記事は  **有料会員記事** です。有料会員になると続きをお読みいただけます。

【10/13まで】デジタルコース(月額3,800円)が **今なら2カ月間無料!** 詳しくは [こちら](#)。

連載

検察・再生への道 証拠改ざん10年(全5回)

第1回

「裁判に勝ちたい」が招いた不祥事 検察改革の現状は

2020年09月24日07時00分 



第2回

捜査の録音・録画進んだが「自白は証拠の王」なお強調

2020年09月24日18時30分 



第3回

特捜の新「武器」に潜む危険 司法取引・電子鑑識に是非

2020年09月25日16時00分 



[この連載の一覧を見る](#)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

